



232 聖マリアンナ医科大名誉教授 長谷川和夫

「今日は何月何日ですか？」  
「今あなたはどこにいますか？」  
「桜、猫、電車 3つの言葉を覚えてください。後から聞きます」  
「100引く7はいくつですか？」  
そこからまた7を引くと？」  
多くの医師が、認知症の診断に使っている「長谷川式簡易知能評価スケール」。この検査の生みの親であり、我が国の認知症治療の第一人者であった精神科医で、聖マリアンナ医科大名誉教授の長谷川和夫医師が、11月13日に都内の病院で亡くなりました。享年92。死因は、老衰との発表です。

# 「認知症とは何か？」世に問いかけ



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

「医師向けの講演会で、僕は何度も長谷川先生からそう拝聴し学びました。」

そんな長谷川先生御自身が、2017年に認知症であることを公表。昨年1月に、『NHKスペシャル』認知症の第一人者が認知症

になった」が放送され、大きな反響がありました。

「認知症の人は、急にぱっと認知症になったわけではない。通常の状態と連続しているんだ。だから普通の人なんだよ……」

徐々に進行していく自分の姿を、カメラに記録させ続けることの裏には、どんな想いがあったことでしょうか。

権威を手放し、老いていく自分、物忘れが増えて日常生活に失敗していく自分を全国民に見せることによって、「認知症とは何か

？」を世に問いかけた。何千人という認知症の方を診てきた先生は、つまり自分自身を「最期の臨床報告」としたのです。

果たして、僕が長谷川先生と同じ状況になったら、同じ勇気が持てるだろうか。否、終末期を見つけてきた僕であれば、自分の死にざまをメディアに差し出すことが、最期で最大の臨床報告となるのだろうか——長谷川医師を偲びながら、僕は自問自答しています。

先日『ザ・ドクター』という医療もののお芝居を見ました。主演の大竹しのぶさんが、「私は人間である前に、医師だと思っています」と語るシーンがありました。大変重いセリフです。

人間として行動すべきか、医師として行動すべきか——時々、二つの自分が葛藤します。コロナ禍においては尚の事。無論どんな職業でも、そういう場面があるでしょう。長谷川先生は、認知症を得て二つの自分を見事に融合されました。真のプロフェッショナルとして、旅立ちました。